

始



8
322

旅行

家
土産

京都の巻



御所南門

現時の御所は
孝明天皇安政二年の御
造營にて紫宸清涼其他
の宮殿結構壯麗と申し
奉らんもかしこし南門
は即正門にして停午の
日に向へり



山川の音にのみ

聞くも、数を

みをはやながら

見る由もがな



平安神宮應天門

桓武天皇奠都一千一百
年祭に當りて岡崎の地



に大極殿を模造し碧瓦

朱楹其規模宏壯古昔の

盛時を現今に目撃する

を得せしむ京都有志者

の功亦偉なり



平安神宮時代行列

衣冠甲冑陣笠羽織延暦

の昔より慶應の近時に

至るまでの風俗沿革を

散髪束髪洋服して見る

今の大御代實に千載一

遇明治の賜なり

月雪は昔の

まゝ、やひがし山





金閣寺

一代豪華似水流
凄凉今日暮雲愁
寒松影落空園
月橋葉風翻滿
寺秋金閣樓中
塵漠々白蛇塚
畔草油々山僧
不管興亡事
說將軍往昔遊

山田松堂詩





銀閣寺

應仁の亂に懲りず海外の
書畫を弄びて此閣を設く
將軍の心事眞に歎すべし
されど點茶聞香挿花の技
其他の美術東山公より進
む風流の道に於ては少し
く賞するも不可なからん

清水寺

ちらくと

音羽のさくら

ちりつんつ

てんご三筋の

瀧のしら糸



由縁齋の一首當寺の風景を
よく盡くせり





東福寺通天橋

橋底停車酒半醺

仰看霜樹亂紛紛

家未卻上玉龍背

踏過一溪紅錦雲

夕ぐれや 頼山陽

手をすれくに

ちる紅葉

虚白

祇園神社

八阪神社即祇園ミ號す

神殿の宏壯は更にもい

はず繪馬堂拜殿等に諸

名畫工の筆の跡多し都

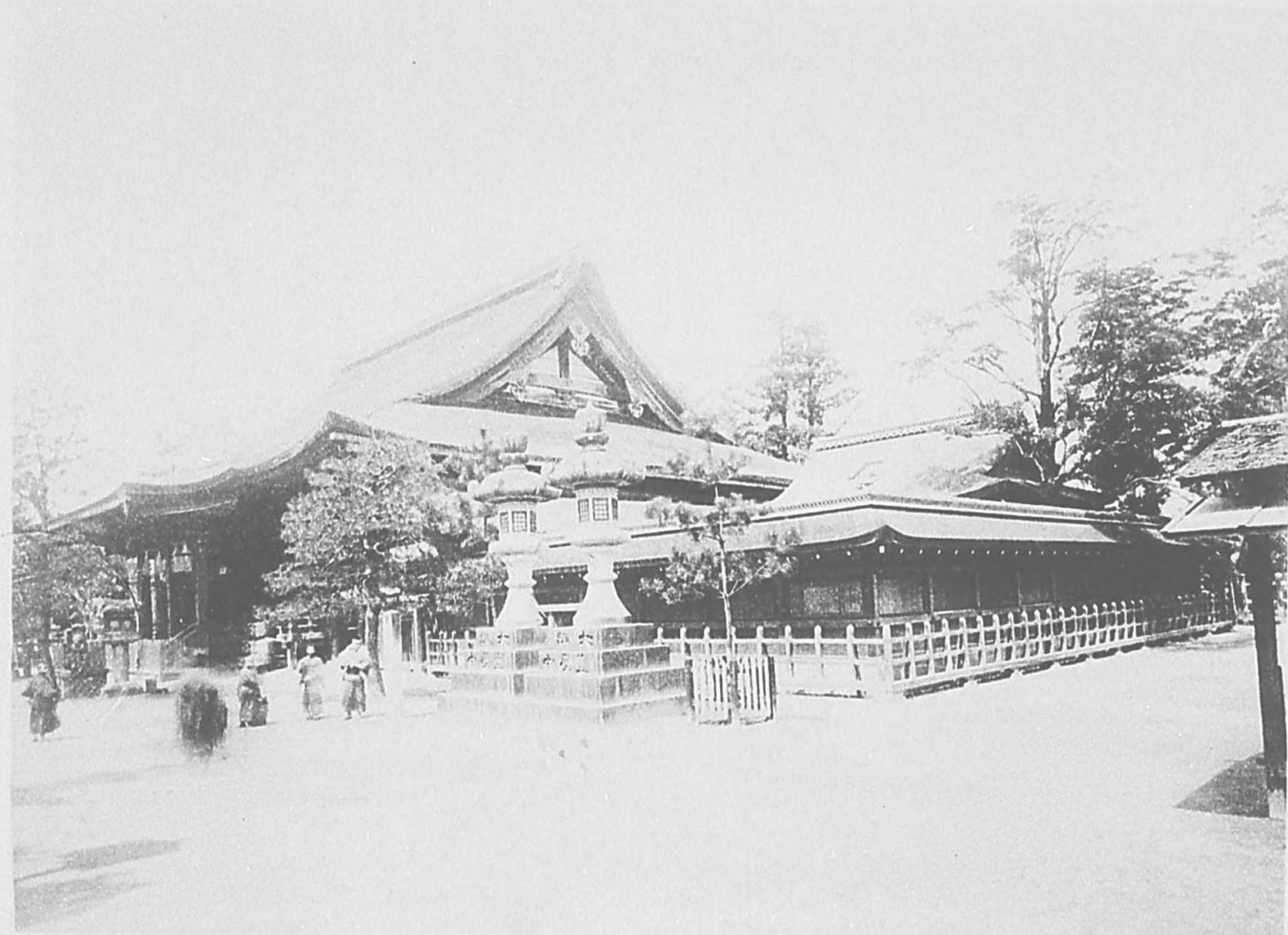
下第一の賑はしき社に

て四時晝夜詣人絶間な

く毎年七月十七日二十

四日の例祭には山鉦を

曳出す祇園會是なり



祇園祭禮船鉾

柳櫻のそれならで都の夏の錦は祇園祭なるべ

し數多の鉾の裝飾は更

にもいはず行きかふ人

の袖袂まで綺羅を競ひ

店先の金屏風は墨畫彩

色おのく名手のふが

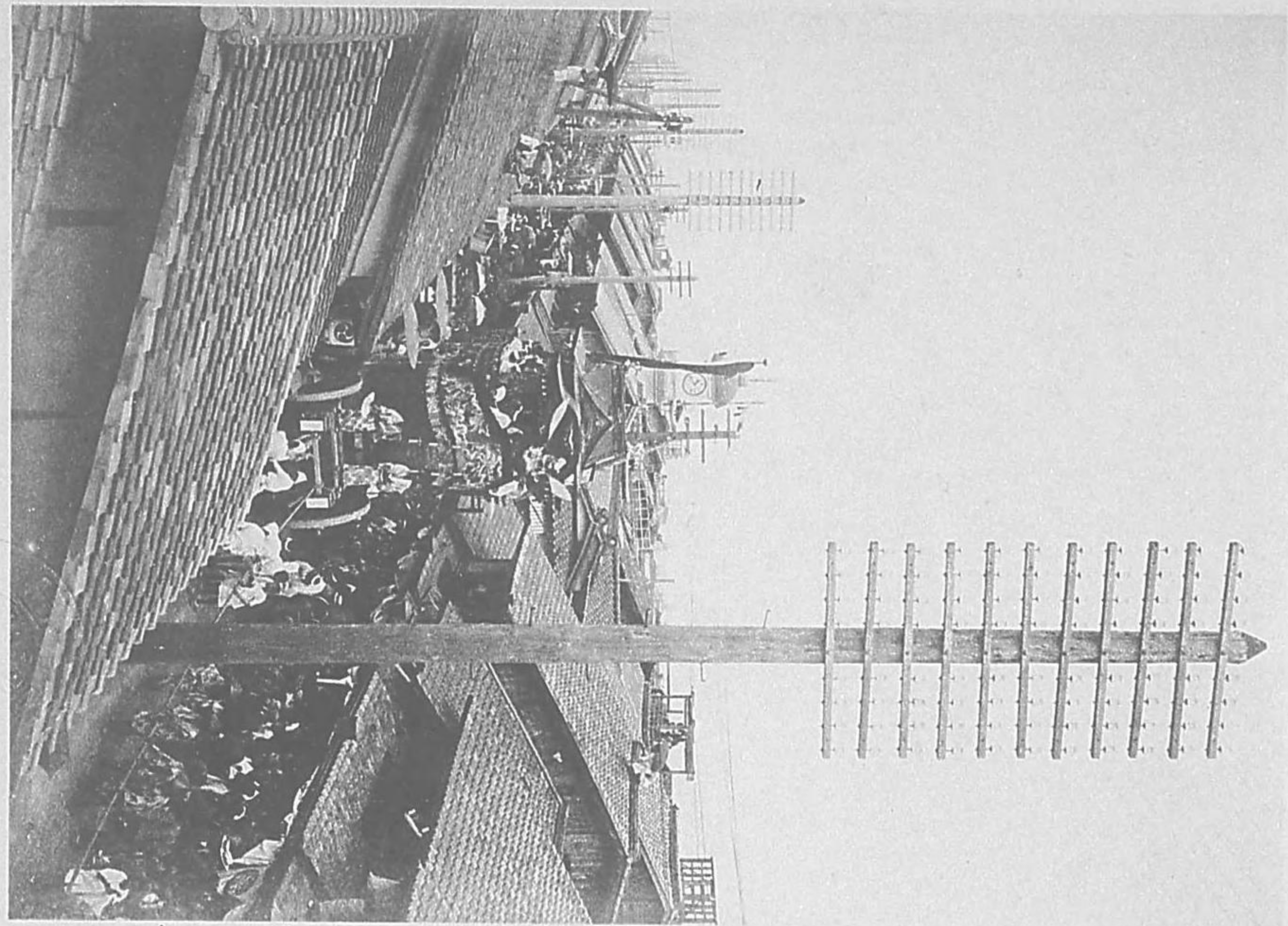
ける巧妙目もあやなり



鉾を引く

人のきはひも

都かな



祇園の夜櫻

夕月の入りぬる

後もさくら花

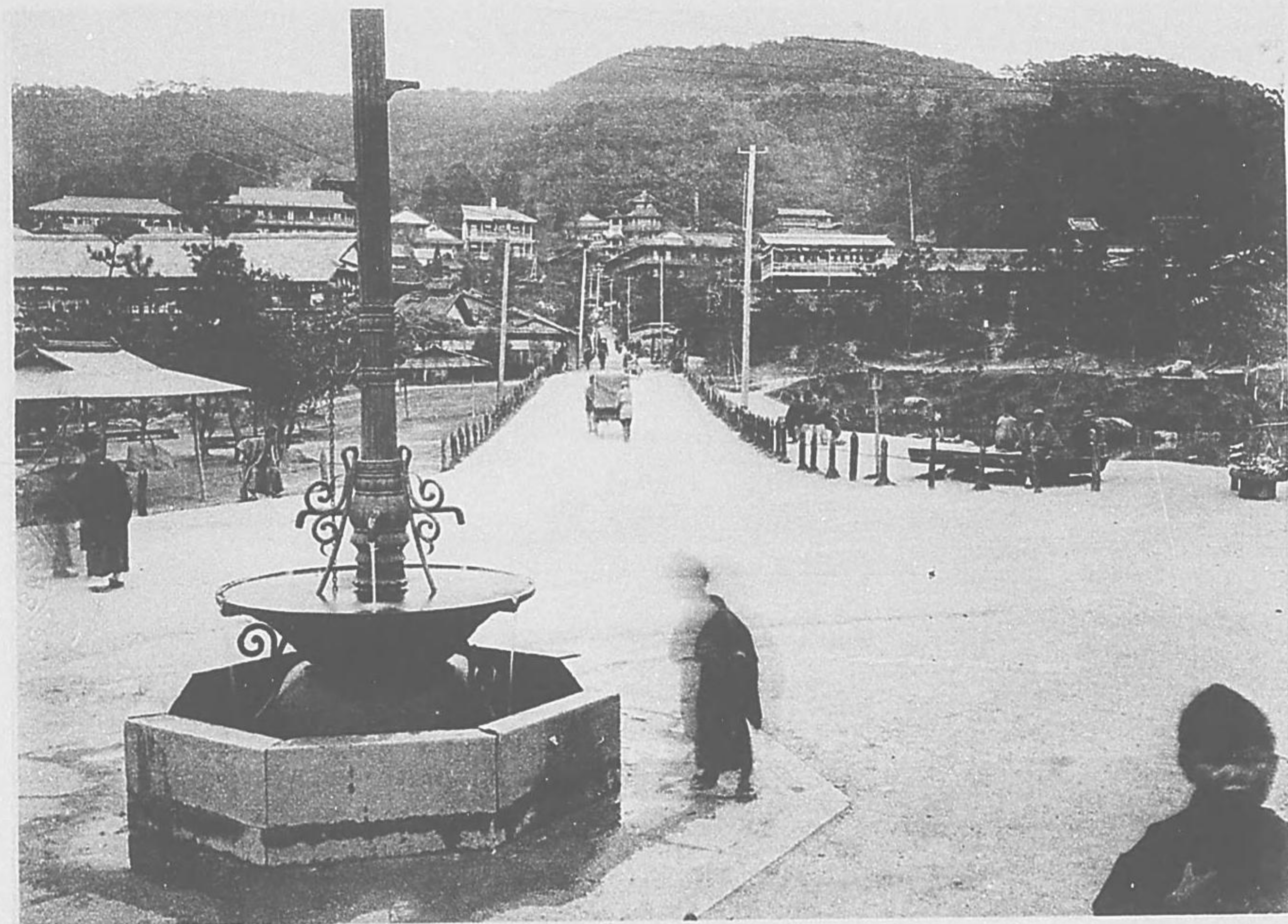
さける木陰は

闇さしも無し



橋枝直がよめるげにさるこ
なり盛の櫻のみかは物言ふ花
の愛嬌には終夜遊びてもなほ
飽かぬなるべし





圓山公園

酒肆連山郭

誰如此關高

皇城纒咫尺

民非入毫毛



池促山公醉

妓思謝傳豪

壯遊能幾度

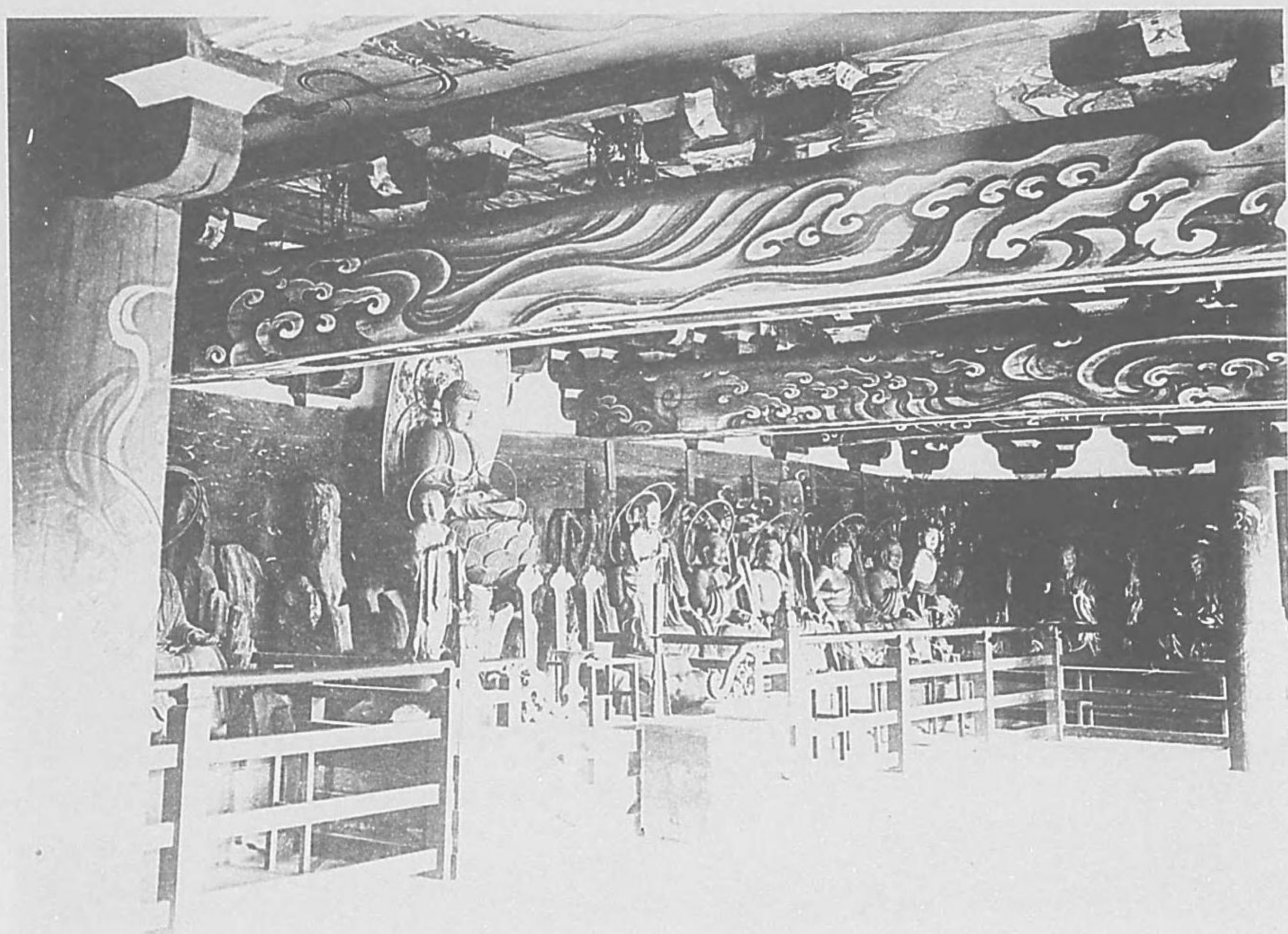
莫禁管絃嘈

篠小竹作

大徳寺山門樓上



柴屋軒宗長此山門を修造せし後千利休其樓閣を修補し自像を置きしより圖らず罪を豊公に得たり此閣上に坐して思へば連歌師茶人の好事心真に禪理を信じて此修補をなせしか





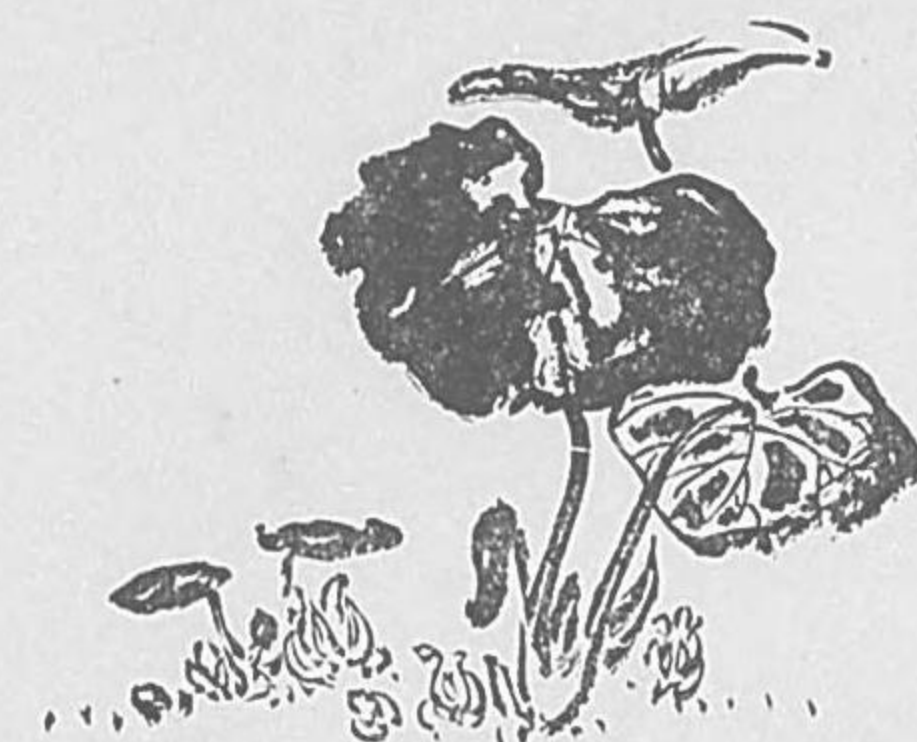
知恩院山門

森々たる樹木巍々たる殿
堂と相映じ風光畫圖に似
たり山門の路傍櫻樹並び
立ち春
花爛漫
の時は
韻士俗客を問はず來集し
て芳艶を賞す宜なり山の
名を華の頂と稱するこゝ



黒谷門前

熊谷直實が一の谷の合戦に無常
を觀じて發心せし趣を鐵懸松に
偲び源空上人が
念誦の時に異香
蕭じたる法徳を
紫雲石に仰ぐな
ど皆此精舎の境
内にあり諺に尊
い寺は門からといふも宜なり





東 本 願 寺



慶長七年教如上人奉命
 に據りて之を創す爾來
 宗門繁榮して西本願寺
 と共に參詣の男女常に
 堂前に蟻集す殊に宗祖
 の忌月法會には諸國よ
 り信徒來り詣づる事年
 を逐ふて盛なり

西大谷

眞宗の開祖親鸞聖人の

廟所信徒の最仰ぎ尊む

淨地たり門前の風景人

工になると雖池上に架

せる花崗石の眼鏡橋い

と美し蓮花盛の頃は芳

香薫じて極樂世界もま

のあたりなり



大佛鐘

國家安康の銘字は遂に豊
臣徳川二家の戦端を開け
り今や此鐘一の名物とな
りて看る人たゞ其巨大に
驚き其感を歴史に及ぼす
者少し

佛與檀越俱灰滅

耳塚蕭條春草多

頼杏坪句



南禪寺山門

百日鬘に黒天鷲織の桔梗
の紋付白班の鷹の御み來
る片袖の歌を見て欄干に
據りて見ほをさればせり
上げとなりて下には淺黄
頭巾の旅行者打下す手裏
銀を杓にて受け止め順禮
に御報謝の暮切劇場にて
婦女童幼も馴染の山門雅
よりも俗が普通なるべし



六角堂

聖徳太子観音の金像を
淡路の海中に得て此所
に安置し頂法寺と號す
西國三十三所第十八番
の靈場なり見真大師佛



告によりて真宗を開基
し專慶法師夢中に悟り
て立花の奥旨を極む菩
薩の利益さまざまなる
かな





三十三間堂

棟の由来柳の精の

あはれは淨瑠璃に

語り傳へ星野和佐

が矢數の競争は演

劇の脚色となる佛

の數は三萬三千三

百三十三體あると

いなと童謡に歌ふ

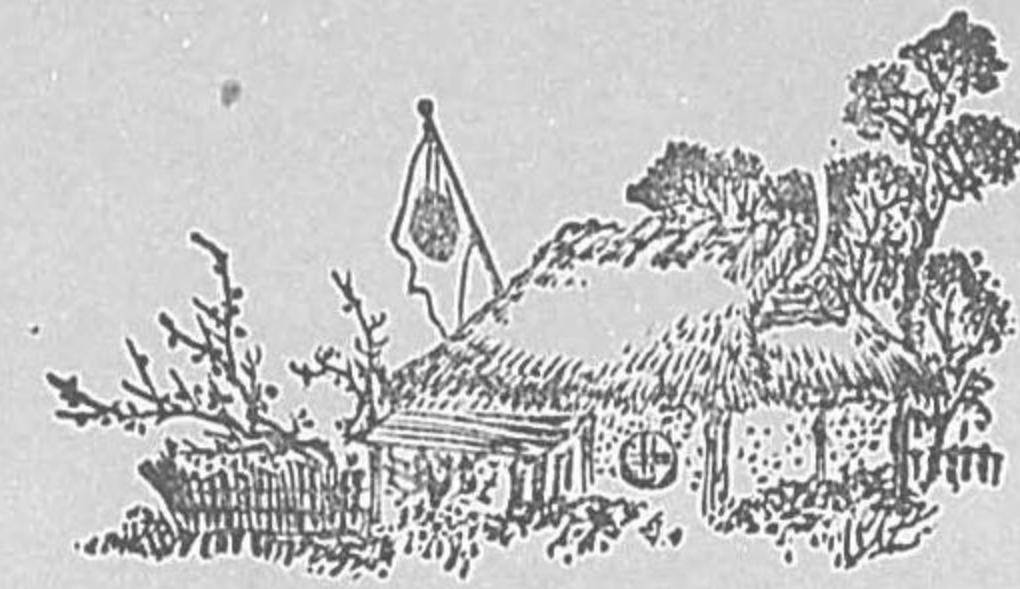
はかぞへて見ぬ證

據なるべし





豊國神社



民間より起りて位人臣
を極め六十餘州を平定
せし餘威を振ひて朝鮮
大明を恐怖せしめし古
今未曾有の豪傑豊太閤
の神靈は阿彌陀が峯の
麓に赫然たり

咲満ちて

上なき色や

桐の花

四條夜景

涼棚風樹簇清漪
獨倚橋欄拂暑襟

萬點紅燈天不夜
誰看明月漾波心

山
中
靜
逸
が
妙
作
風
景
賦
し
得
て
殘
さ
ず



丈山の口が

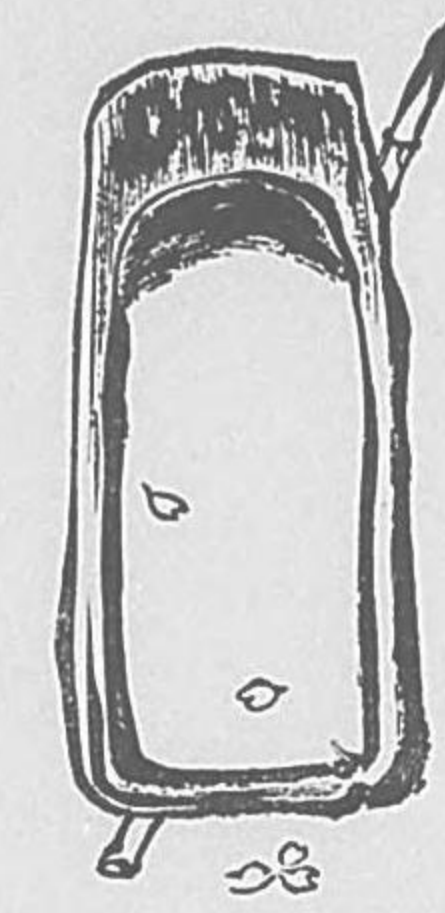
すぎたり夕涼

夜半亭の
一句人をして絶倒
せしむ

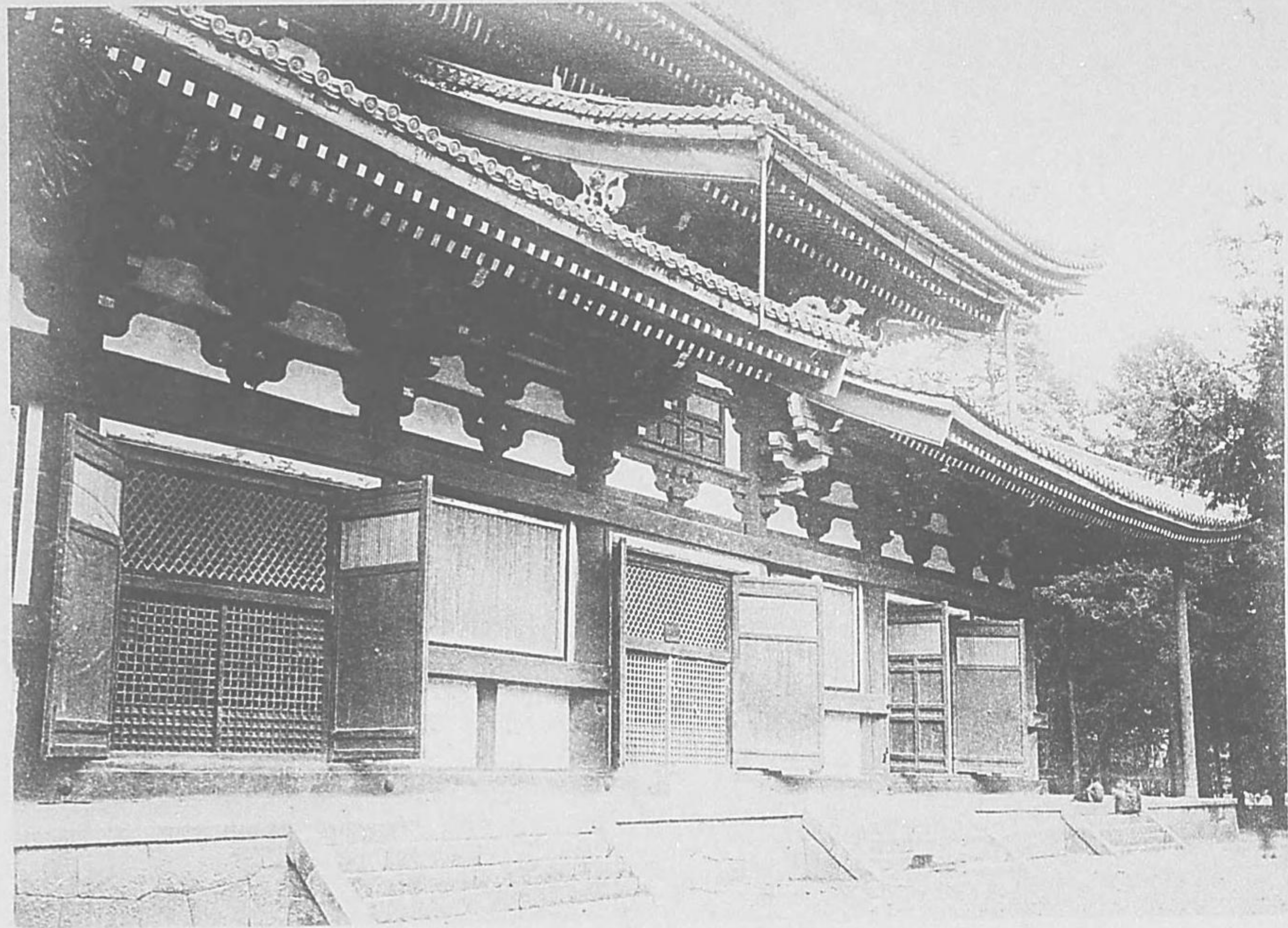


東
寺

延暦の朝大納言伊勢人をして
 朱雀門の東西に兩寺を造營せ
 しめ給ふ弘仁の帝西寺を守敏
 僧都に東寺を弘法大師に賜ふ
 寺域
 凡三
 萬坪
 なり慶賀門内の瓢箪池には燕
 子花多く盛の頃は水色紫に變
 じて麗妍尤愛すべし



*堂塔
門廡
廣大



二
條
城

永祿十二年織田氏始
めて此城を築き慶長
七年徳川氏再造す現
今は離宮となれり其
殿内の美麗結構は窺
ひ知る事能はれども
其外廓城樓巍然とし
て市内の壯觀たり



上加茂

千早ふる

加茂の社の

姫小松

ふろづ代ふさも

色はかはらじ



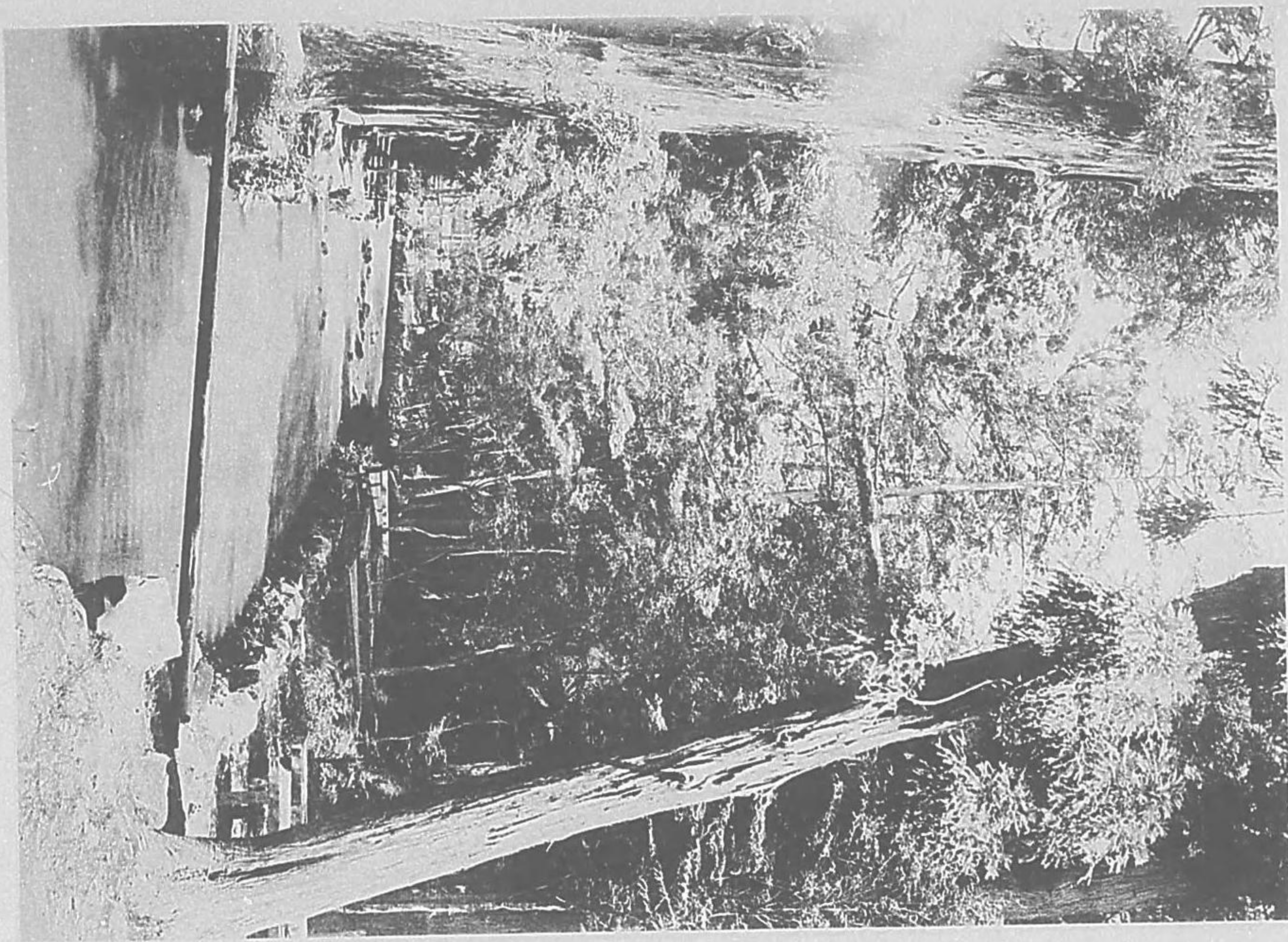
いかなれば

その神山の

あふひ草

年は経れども

二葉なるらん



下鴨神社

深樹綠濃やかに清流響

潔し朱の鳥居を過れば

いつも御祓せし心地し

て心身ともに爽かなり

葵祭の古雅高尚なる他

社に其類を見ず土佐家

の書巻物源氏物語の面

影ありていとゆかし



鹿が谷法然院

古松鬱々 脩竹青青 白雲

軒に往來して 幽閑氣味

深く名月窓に 上下して

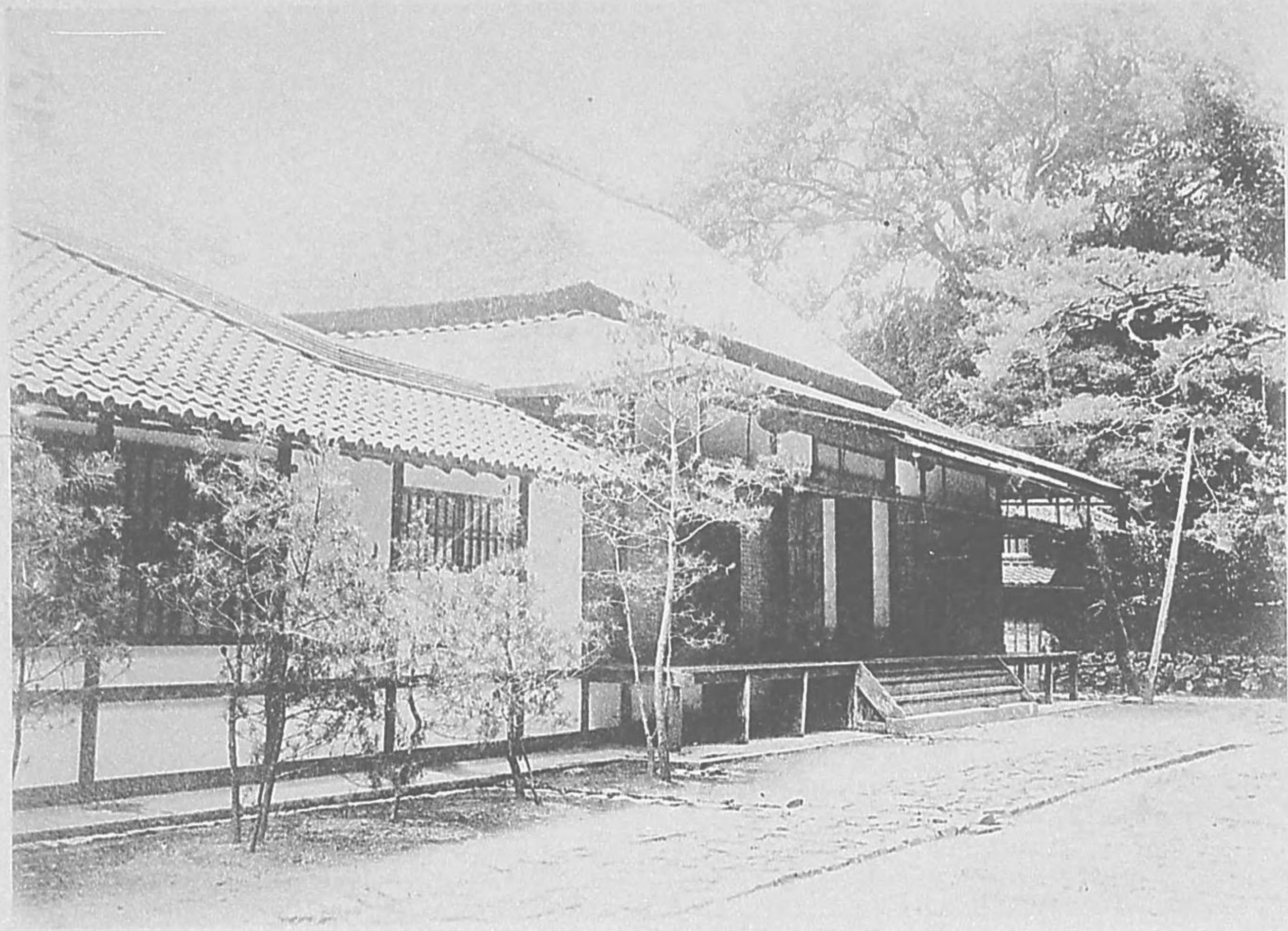
清淨真如を 照す



松風の

すくしく通ふ

念佛かな



永 觀 堂

蕭寺憑欄入晚鐘
敗荷吹老一池風

水光不與落暉滅
倒照殘楓分外明

招 三 樹

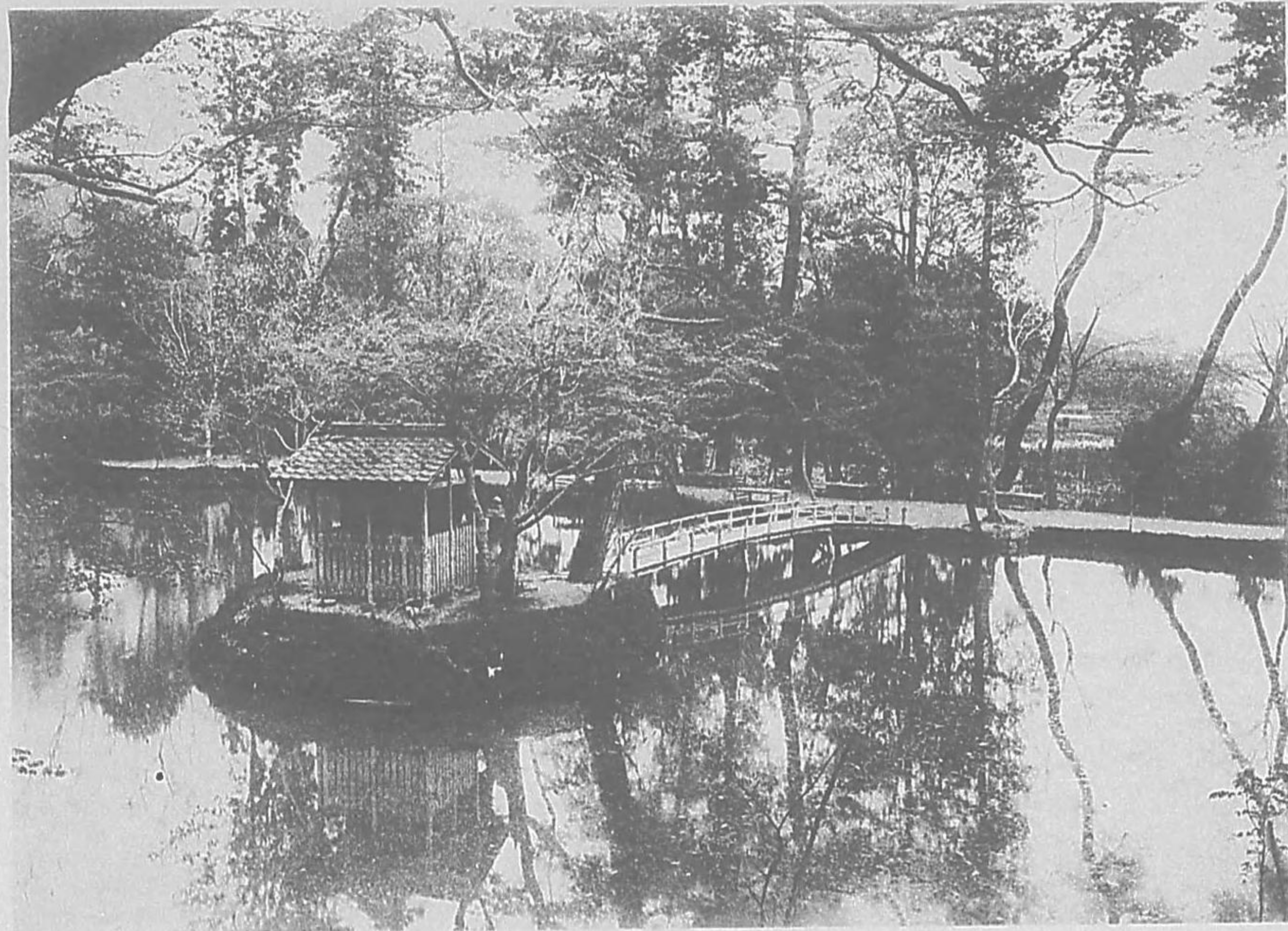


佛は永觀運しこのたまひしとか

鐘の音に

紅葉見かへる

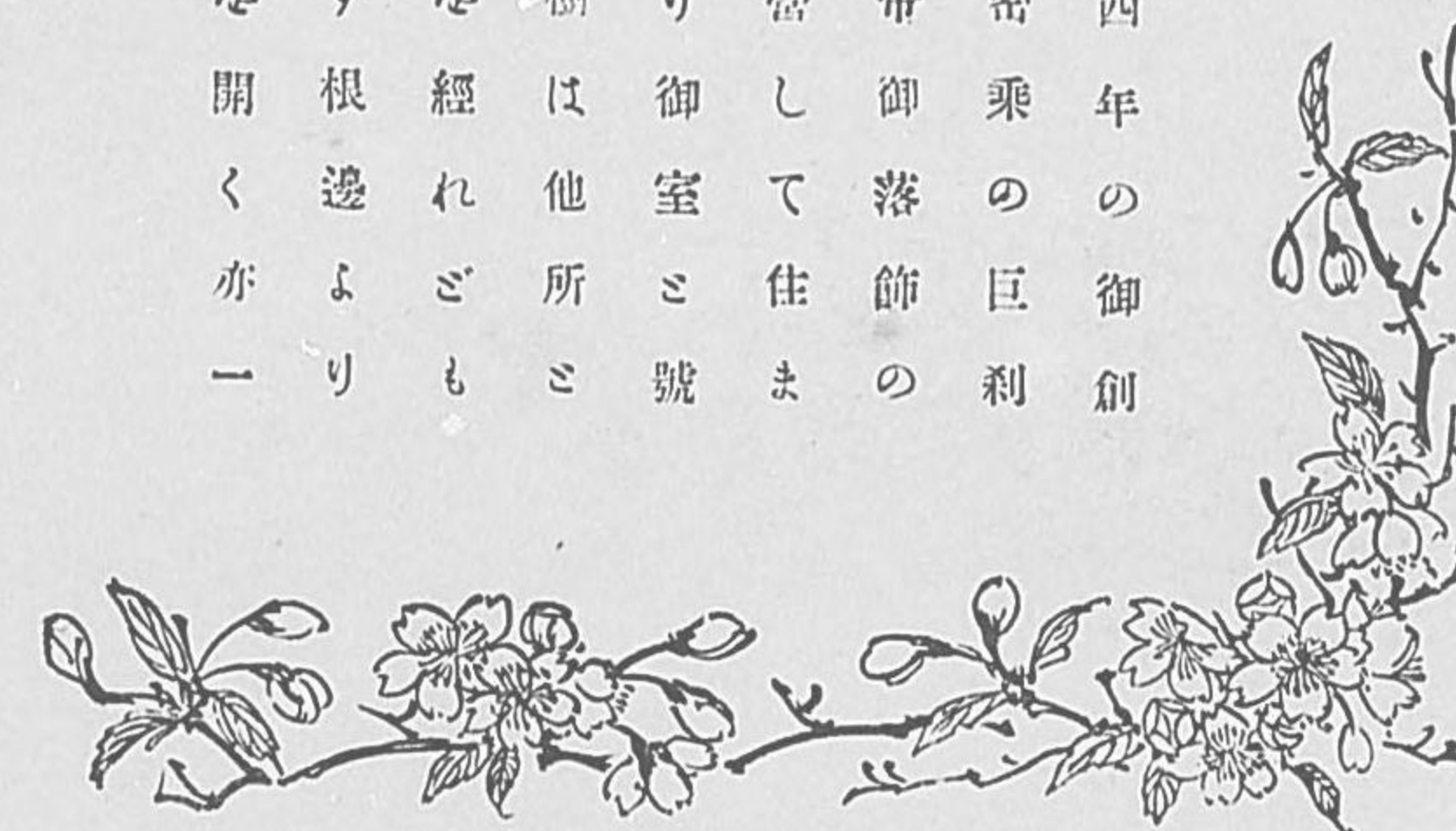
夕かな





仁和寺

光孝帝仁和四年の御創
建にて眞言密乗の巨刹
なり宇多帝御落飾の
後宮殿を造營して住ま
せ給ひしより御室と號
す此寺の櫻樹は他所と
特別にて年を経れども
幹身延長せず根邊より
枝這ひて花を開く亦一
奇なり



嵯峨釋迦堂

五臺山清涼寺ニ號す本

尊釋迦如來は毘首羯磨

が赤梅檀を以て造れる

所にて天竺靈且我朝と



三國に傳來せる靈像な

り又本堂の東に一堂あ

り栖霞寺と稱す阿彌陀

佛を安置せり



北野天神

菅神右近馬場に鎮座

ましくしより靈驗著く

代々の帝御尊敬ありて

社殿の結構いはんも更なり

詣人晝夜間斷なく神徳

ますく輝けり



仰ぐぞよ

心づくしの

末つひに

こゝにきた野の

神のちかひな



平野神社

御室は花人を埋め平

野は人花を埋むと或

人の評せし如く當社

の境内爛漫の候には

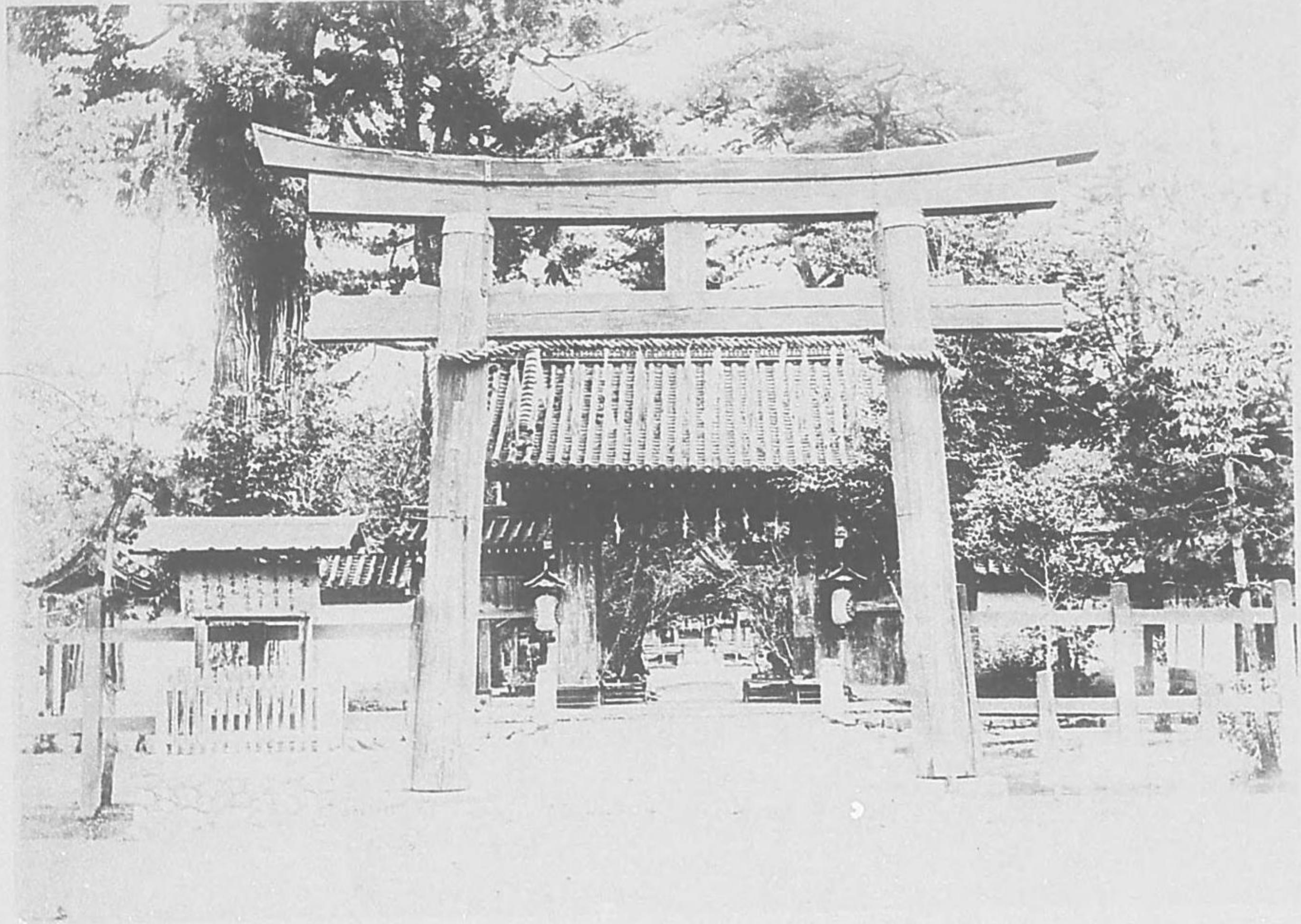


酒舗茶店花間に連り

毎夜篝を焼く尤壯觀

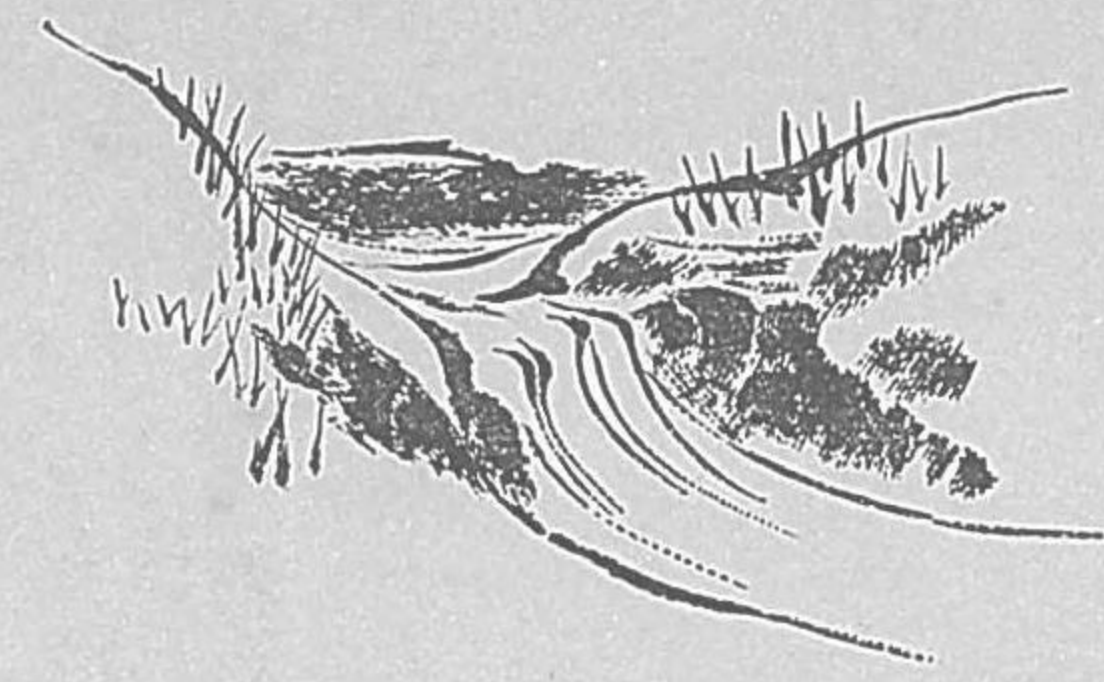
なり之を平野の夜櫻

と稱へて古來名高し





若王寺神社



春は櫻秋は楓閑靜最愛す
るに堪へたり山中の飛泉
清冽にし鬱樹之を圍む世
に若王寺の瀧といふ炎暑
を避くるに適せり

流水に

しほ氣流すや

汗ぬぐひ

梅の宮の雪

六出花開く朝一瓢を携
へて雪見の解を取るも
酒解の神の恵とありが
たし興に乗じて詩歌を
うみ出すも平産を守ら
せ給ふ御利益を蒙ふる
なるべし



つむ雪も

薫るばかりや

梅の宮





嵐山

清溪一曲水迢々

夾水櫻花影亦嬌

桂楫誰家貴公子

落紅深處坐吹簫

頼山陽



大堰かは

歸らぬみづに

かげ見にて

今年もさける

山ざくらかな

香川景樹

明治卅四年八月廿五日印刷

(旅の家土産第三十六號)

明治卅四年九月一日發行

(非賣品)

神戸市北長狭通五丁目四十六番地
光村利源方寄留

發行兼印刷者 中尾新太郎

神戸市北長狭通五丁目四十六番地

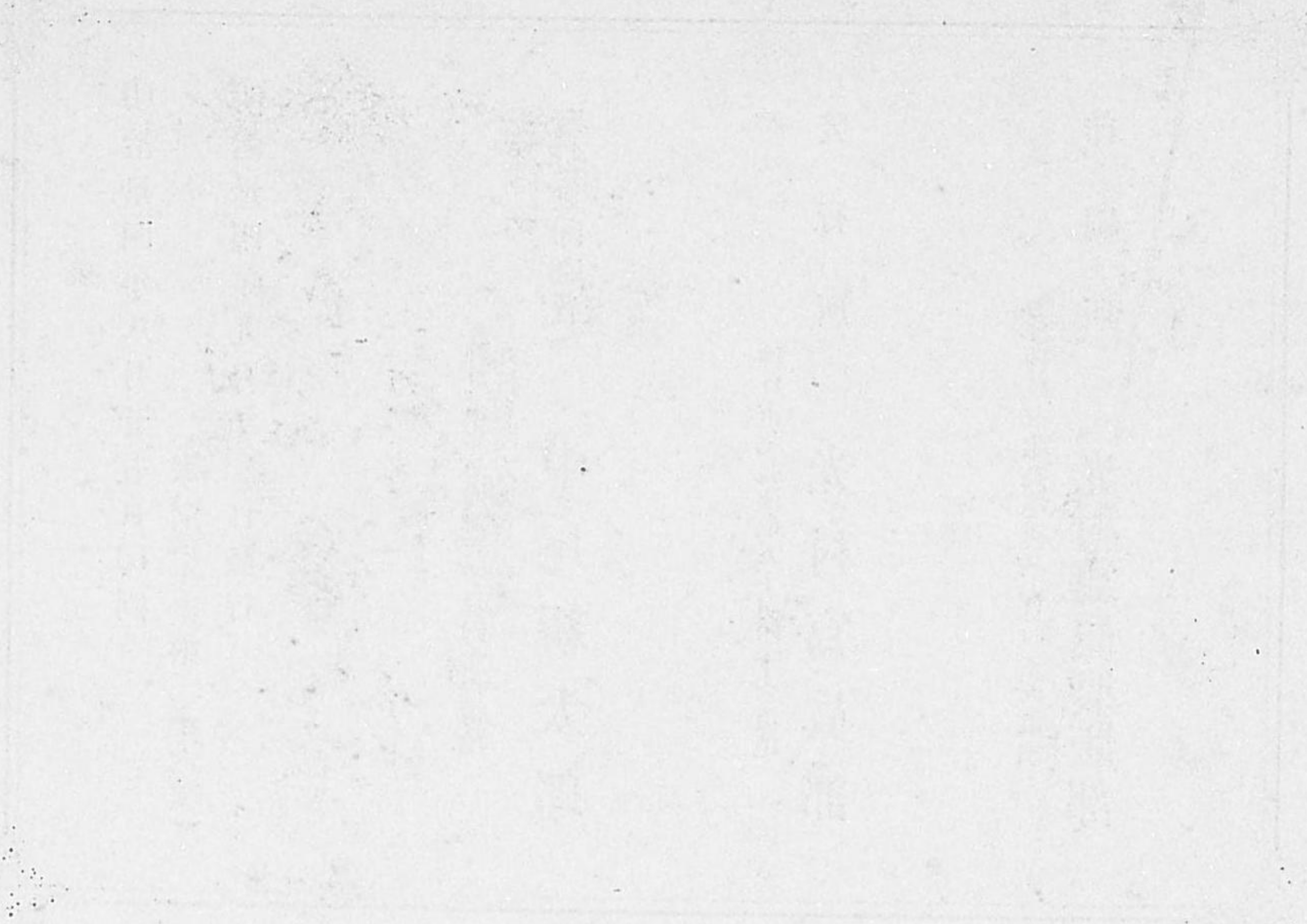
發行所 光村寫眞部

神戸市北長狭通五丁目四十六番地

印刷所 光村寫眞製版部

8
222

16/9/54





8
222

終

